視力検査マニュアル

【裸眼視力】

① レフ値に記載されているPDを参考に検眼枠を選び、片眼を遮閉する。

② 検査距離3mに置かれた視力表のランドルト環の切れ目を大きい順に出す。

③ 判別できた最小のランドルト環の視力を視力値とする。
このとき視力表の段の3/5以上が判別出来ているか確認する。

【遠見視力】

① レフ値（もしくは前回値）に記載されたレンズを検眼枠に入れる。

② 裸眼視力②～③と同じ工程を行う。

③ 初診で矯正視力（1.0）以上でない場合、前回値より3段階以上視力が下がった場合は屈折矯正を行う。

④ はっきりと見える視標を呈示して±0.5Dのレンズをかざし、見え方を確認する。
「①（+0.5D）のくっきり具合、②（－0.5D）のくっきり具合、
どちらが見えやすいですか？」

〈かざすレンズの目安〉

視力0.1未満　→　+1.00D / -1.00D
0.1～0.6　→　+0.5D / -0.5D
0.7～1.2　→　+0.25D / -0.25D

⑤ ①と②見えやすいレンズに寄せてレンズを交換し、見えやすくなったか確認する。
例：検眼枠に－3.0Dのレンズが入っており、－0.50Dが見えやすいと答えた時
（－3.0D）＋（－0.5D）＝（－3.50D）　を検眼枠に入れる
検眼枠に－3.00Dのレンズが入っており、＋0.50Dが見えやすいと答えた時
（－3.0D）＋（＋0.5D）＝（＋2.50D）　を検眼枠に入れる

⑥ ±0.5Dどちらも見え方が同じ位になったとき、もしくは見え方が逆転したら矯正終了。

⑦ 最後に裸眼視力③をおこない、視力の値をとる。
またこのとき遠見視力②のほうが良い結果であればこちらの視力を結果としてとる。

〈遠視眼〉（「S」がプラス）：最高視力の得られる最強のプラスレンズ度数を求める。
〈近視眼〉（「S」がマイナス）：最高視力の得られる最弱のマイナレンズ度数を求める。

視力検査マニュアル

【近見視力（30cm：多焦点以外）】

① 近見視力表を患者の眼から30cmの位置に置き、ペンライトで照らして視標を呈示する。
2/3 以上判別できた視力を裸眼視力の結果としてとる。

② 検眼枠に遠見での完全屈折矯正値＋年齢加入度数を装用し視力をとる。

	加入度数
40～44 歳	+1.00D
45～49 歳	+1.50D
50～54 歳	+2.00D
55～59 歳	+2.50D
60 歳以上　＆　単焦点挿入眼	+3.00D

【多焦点（PanOptix・EVOLVE）】

・遠見視力（裸眼／矯正）
・近見 40cm（裸眼／矯正／両裸眼）－ 矯正レンズは遠見時の完全矯正を装用する。

【多焦点（Synergy）】

・遠見視力（裸眼／矯正／両裸眼）
・近見 40cm（裸眼／矯正／両裸眼）－ 矯正レンズは遠見時の完全矯正を装用する。
・近見 33cm（裸眼／矯正／両裸眼）－ 矯正レンズは遠見時の完全矯正を装用する。

【多焦点（Vivity・MINIWELL）】

・遠見視力（裸眼／矯正／両裸眼）
・近見 60cm（裸眼／矯正／両裸眼）－ 矯正レンズは遠見時の完全矯正を装用する。
・近見 40cm（両裸眼）